

じょうろ 如雨露作りにかけた 職人としての心意気

根岸さんは銅製の如雨露を作る職人です。今でこそ根岸さんの作る如雨露は高い評価を受けていますが、完成に至るまでは厳しい日々を送りました。お話からは、自分が信じた道にかけた職人としての強い思いが伝わってきます。

●如雨露職人 根岸 修さん

ねぎし・おさむ●昭和19年、東京都生まれ。少年時代を茨城県土浦市で過ごす。中学校卒業後、トタン職人であった父の跡を継いで職人の道に進む。銅製の如雨露作りを手がけるようになり、試行錯誤を繰り返す。完成した如雨露は盆栽の専門家から高い評価を受け、海外での利用者も多い。根岸産業（有）代表。



試行錯誤を繰り返しながら
ようやくできた如雨露

——如雨露作りの職人となるまでのいきさつを教えてください。

根岸 父がトタン職人で、中学を卒業してその跡を継いだことが始まりです。父はさまざまなトタン製品の一つとして如雨露を作っていました。当時、トタン製の如雨露は広く出回っていて、問屋さんに私たちが作ったものを持ち込んでも、信じられないほどの安い値段でしか取り引きできませんでした。こんなことでは、わが家の仕事は成り立たなくなってしまうのではないかとという不安が次第に強くなりました。

そんな中で、私はほかと違うものを作って差別化を図らなければと思い、銅で如雨露を作ることを思いついたのです。今から30年以上も前のことです。

——初めてのことであり、ご苦労もあつたのではないですか。

根岸 当初はどんな如雨露がいいのか見当もつきませんでした。そこで試作品を持って日本盆栽協会に伺い、改善点の指摘を受けました。指摘を受けたらその日のうちに直して、翌日にまた試作品を持ち込む。そうした試行錯誤を繰り返して、毎日のように盆栽協会を訪ねました。指摘を受けながら改良を重ね、「これなら大丈夫」という言葉



如雨露はさまざまな部品から構成される。円錐形の部品は口金で、水やりの用途に応じて数種類を使い分ける。根岸さんの作る如雨露は長い竿が特色。試行錯誤の結果、このような形になった。この長い竿で水圧を調整し、盆栽にやさしい水を注ぐことができる。

をいただくまで3カ月あまり。その間はほとんど収入がなく、生活はとても厳しかったですね。

——販売にもご苦労があつたのではないですか。

根岸 そのように苦労して作った如雨露を車に積み、電話帳を見ながら盆栽や園芸用品を扱う問屋さんを回りました。2カ月くらい回りましたが、一つも売れませんでしたね。そうした中でお訪ねしたある園芸関係の会社が私の作った如雨露を扱ってくださるようになりました。

後で知ったのですが、その会社は大きなデパートの園芸部に商品を購入していました。私が作った如雨露もデパートに置いていただけるようになり、

買ってくださる方も増えてきました。

職人冥利に尽きる喜びを
感じて仕事に向かう

——根岸さんの作る如雨露はプロ仕様ですね。日本を代表するような盆栽家も根岸さんが作った如雨露を使っているのでしょうか。

根岸 多くの盆栽家の方に使っていたいています。紹介してくださる方があって、その中のお一人をお訪ねしたことがあります。日本を代表するような大先生だけにとても緊張しました。

お訪ねしたら私の作った如雨露をたくさんお持ちで、うれしくなりました。先生によると私が作った如雨露から注ぐ水はたいへん柔らかく、鉢上の



部品をはんだ付けしている様子。根岸さんは如雨露作りの全工程を一人で行う。

品を作ります。その後、それぞれの部品をはんだ付けして、如雨露の形にします。

よく誤解されるのですが、如雨露一つを作り上げたら、また最初の工程から始めるわけではありません。1000個あまりの如雨露を作るよう、切断や部品製作などそれぞれの工程の作業を集中して行つたのです。そのほうが効率的です。

——お仕事の喜びを感じるのはどのようなときでしょうか。

根岸 如雨露を買ってくださった方がらさまざまな喜びの声をお聞きすることがあります。中にはご丁寧にお手紙をくださる方もいらつしやる。私もお客様にお手紙を差し上げて、感謝の気持ちをお伝えするようになっています。お客様喜びの声に接するととてもうれしくなり、ありがたい気持ちでいっぱいになります。職人冥利に尽きると言ってもいいでしょう。如雨露を使つてくださるお客様も作る私もともに喜ぶ…それが一番です。

今では職人の仕事も分業制になっていることが珍しくありませんが、私は一連の作業をすべて一人でやっています。そのため、自分で全工程が把握できます。ある人は、私の仕事を見ながら、日が進むごとにだんだん形になっていくのがわかることが素敵だと言ってくれました。そうしたことが、喜びややりがいにつながっているのかもしれない。

れません。

厳しさの中でも、この仕事を辞めようと思ったことはない

——厳しさはどんなところにありますか。

根岸 先ほど申し上げたようにほとんど収入がなく、完成品ができるまで試行錯誤を繰り返していた時期がありました。そのときはとても厳しかったですね。毎日が死活にかかわっていたといつても過言ではありません。正直、そのころは自分のことだけで精いっぱい、人様のことを考える余裕はありませんでした。

しかし、そんな状態でも仕事がいやになったり、辞めようと思つたりしたことは一度もありませんでした。自分で始めたことだから、最後までやり遂げなければならぬという意地のようなものがあったのかもしれない。

——お仕事ではどんなことに心がけていらつしやるのですか。

根岸 私自身は盆栽をやります。私が盆栽をやると、自分の使い勝手を反映させた如雨露を作つてしまつからです。如雨露の仕様は、やはり専門の盆栽家に任せたいほうがいいと思っています。使う方の立場に立つた如雨露を作りたいからです。

一方で職人は頑固で自分の作つたものに対してこだわりがなければ、いい仕事はできません。使う方の立場を考

慮しつつ、自分の仕事にこだわりをもつ。矛盾しているようですが、その両面の兼ね合いを図つてこそ、職人としていいものが作れるのだと思います。

——近年、若い人たちがなかなか仕事に就けなかったり、すぐに辞めてしまつたりするという問題が指摘されています。どのようにお考えでしょうか。

根岸 私たちが若かったころは、仕事をしなければすぐに困窮して生活が立ち行かなくなるといふ不安がありました。それだけに私を含めて、必死に仕事をしたものです。今は社会が豊かになり、少くらしい仕事をしなくても生活できるようになったことが、若い人たちの就労意識の薄さの背景にあるのかもしれない。

ただ、今の若い人を見ると本当にやる気があるのだろうかと思つてしまつことが少なくありません。仕事にはよい面もあれば、厳しいこともあります。ある仕事に魅力を感じたとしても、よい面ばかりを見ていたのでは長続きしません。少なくともある年齢までは、他人からどう思われようと、いったん就いた仕事に必死に取り組んでみるのが大切です。

私もかつて朝早くから夜遅くまで働く日々を送っていました。人の倍は働いたのではないかと思えますね。そうしてようやく人が認めてくださるような仕事ができるようになるのではないのでしょうか。